

第8回新潟出版文化賞受賞作品紹介

※カッコ書き内は、(著編者名、住所、発行者)です。

大 賞

小説 くじら学校 (小林 甚三、上越市、ファーストワン)

海岸に打ち揚げられた一頭の鯨で小学校を建てたという明治時代の美談に当時の塩の専売制度や教育界の実情を絡ませた奥行きのある小説。登場人物たちの会話や鯨解体の場面から作者の激しい息づかいが聞こえてきた。“小説ならこれだ”と私はメモした。

選考委員特別賞 (新井満賞)

律子の舟 新潟水俣病短編小説集 I (新村 苑子、新潟市、玄文社)

穏やかに暮らしてきた人々を襲った水俣病は体をむしばんだだけではなく、家族の生活も破壊。そうした状況を様々な角度からわかりやすく登場人物に語らせており、深く考えさせられる力作である。

優 秀 賞

開港場・新潟からの報告ーイギリス外交官が伝えたことー

(青柳 正俊、長岡市、考古堂書店)

開港場新潟に関する実態を示す資料は乏しい。本書は、新潟在住のイギリス外交官の公式報告書を探し出して翻訳し、その報告の背景までも明らかにしようとした貴重な記録である。

磯見漁師 (斉藤 凡太、出雲崎町、角川書店)

「遠花火山下清何処で見る」、句集を読んだら出雲崎に住み磯を漁場としてカキやモゾクを採るこの俳人に会いたくなった。米寿の体から磯と俳句の香が魅力的にしてくるのではないか。

連携を求めて、山と里と海の民 にいがた 流域を行く

(伊藤 忠雄、新潟市、新潟日報事業社)

新潟県内の川や流域の風土や歴史、そこに生きる人々の姿を取り上げた紀行書である。川の持つ今日的意義も、優しく読者に問いかけている。

新発田藩出身 幕末の種痘医 桑田 立斎 ~「牛痘児図」による天然痘撲滅への挑戦~
(高橋 眞一、新潟市、新潟日報事業社)

桑田立斎創作の牛痘児図と我国における牛痘種痘法の普及とのかかわりを論じた卒論。立斎の「牛痘児図」による天然痘撲滅への挑戦をまとめた高著である。

文 芸 部 門 賞

俳句—その芸術性 (金山^{かなやま} 有紘^{ゆうこう}、十日町市、玄文社)

俳句について桑原武夫の「第二芸術論」を切り、世阿弥をひもとき、アメリカのブームを探りながら、その芸術性と魅力を語る。著者本人なりの言葉で書かれているところに”熱の高さ”が感じられる。

一筋の靱 (福原^{ふくはら} 滋^{しげる}、新潟市、新潟日報事業社)

史実に基づいて書かれた作品は、概して、小説というより記録誌のようになりがち。でも、この作品は史実を知らない読者にも、小説として十分満足してもらえる。

詩集 過ぎ去る時の河畔に (田代^{たしろ} 芙美子^{ふみこ}、新潟市、花神社)

瑞々しい言葉が連なり、優しい気持ちになり、声に出して読みたくなる詩集。著者の 91 歳という年齢に驚き、感嘆！ぜひ次の作品も読みたいという心持ちになる。

ディーマツ'ツ ハイイ
DMAT's High 失意の災害医療派遣チーム

(丸山^{まるやま} 正則^{まさのり}、新潟市、新潟日報事業社)

2011. 3. 11に派遣されたチームを追った災害医療小説。「被災病棟の支援」「広域患者搬送」「被災地現場での患者救出」などDMATに課せられた役割を見つめながらいかにして多数を救命するか…… 救急救命医の目で見た現地での描写はなかなかの魅力である。

記 録 誌 部 門 賞

転機 わが学びの日々 (池田^{いけだ} 枝月^{しげつ}、十日町市、文芸社)

師の言葉「続ける力は生きるための自信……」を胸に、二度の火災、疾病、発作との闘い、両親の死等々、幾多の試練と向き合う筆者の「生きる」姿勢の半世紀。

幻の松花部隊 若き義勇隊員たちの満州 (高橋^{たかはし} 健男^{たけお}、見附市、文芸社)

「辛酸をなめた太平洋戦争に関わる記憶を風化させてはならない」という、筆者の気迫を感じさせる一書である。本書は著者の前回の受賞作とともに、いまや満州開拓団に関する第一級の基本文献である。

むらの軌跡 (丸山^{まるやま} 昇^{のぼる}、新潟市、著者本人)

津南町樽田、かつて縄文の遺跡があったこの地は今、限界集落と言われている。地域の古老の話や資料を収集してまとめた一冊。祭礼時の人々の笑顔が眩しい。

越後小国氏の事蹟—研究と資料 (高橋^{たかはし} 実^{みのる}、長岡市、小国観光協会よっていがんかい)

長岡市小国地区(旧小国町)の名族小国氏に関する史料を収集、小国氏の事蹟をまとめた高著。小国氏から大国実頼へ、小国氏研究の集大成といえる。